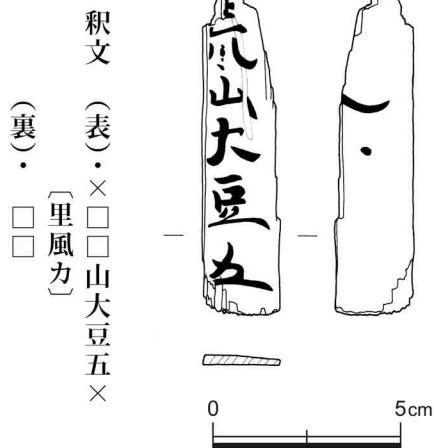


伊勢原で大豆？ 古代の木簡出土

伊勢原市 西富岡・向畑（にしとみおか・むこうばた）遺跡

木簡って何なの？



●奈良・平安時代など古代には貴重な紙の代わりに木札に文字を書き留める「木簡（もっかん）」が使われていました。紙は土の中に埋まるととても残りにくいものですが、木簡は地下水の多い遺跡や井戸などの水分が多い場所では残ることがあります。このため遺跡から見つかる貴重な文字史料として、地域の歴史解明の重要な手がかりになります。



●見つかった場所と木簡について

木簡が見つかったのは伊勢原市の西富岡・向畑遺跡です。木簡は、古代の集落の中にあつた谷から見つかりました。一緒に見つかった木材を年代測定したところ、7世紀後半（およそ大化の改新～大宝律令制定までの期間）とわかりました。木簡もおそらく同じ頃のものと考えられます。今回見つかった木簡は、古代のものとしては神奈川県内で7遺跡目の発見例で、伊勢原市では初めての発見です。上下左右は欠けていて全体の形はわかりません。大きさは長さ8.6cm、幅2.0cm、厚さは約3mmで、アスナロの木を使っています。

何が書いてあったの？



●筆で書かれた墨の跡は表裏に残っていましたが、裏面の線と点は筆ならしとみられます。さて、表面には全部で六文字書かれています。残念ながら一文字目は折れて失われた部分があり文字の全体がわかりません。二文字目からは「風山大豆五」と書かれているようです。欠けている一文字目は残った部分から「里」の可能性が高いです。これを合わせると、「里風山大豆五」となります。「里」は当時の行政単位で、この前には地名が書かれていたはず。「風山」は人名と考えられます。「大豆」は作物の大豆、「五」は数量を表しているため、この下には単位の「斗」が続いて書かれていた可能性があります。以上を考え合わせると、「ある里の風山という人が大豆を五（斗）」納めました、などの意味と推測できます。このことから、古代の遺跡周辺地域では大豆が生産されていたことがわかります。また、一文字目が「里」で、その前に地名が記されていたとしたら、遺跡周辺の集落がその頃どんな地名で呼ばれていたのかわかったかもしれません。そういった意味では少し残念と言えますが、大変貴重な発見となりました。

遺跡の調査はまだまだ継続中です。
さらなる大発見をめざして掘りつづけるよ。

